

中国原子力開発フォーラム国際サミット (CNESDF) 及び国際展示会 (CIENPI) 参加概要報告

2025 年 5 月 12 日
(一社) 日本原子力産業協会

当協会及び会員企業から結成される訪問団一同(全 8 名)は、2025 年 4 月 24 日(木)～29 日(火)の日程で中国の原子力産業協会「中国核能行業協会 (CNEA)」が主催する、中国原子力開発フォーラム—2025 年国際サミット春(CNESDS)及び、並行して開催された第 16 回中国原子力産業国際展示会 (CIENPI) に参加し、合わせて JAIF ブースを出展した。また、CNEA の協力のもと、中国の原子力関係施設への視察も行った。

今回の中国訪問では、サミットでの増井理事長による講演や展示ブースの出展を通じて、日本のプレゼンスを示すことができた。さらに、中国の新規建設プロジェクトの進展や次世代技術の研究開発の状況から中国原子力産業の勢いを実感するとともに、原子力安全対策への取り組みや、先進分野における日中協力の可能性を確認する機会となった。

【中国原子力開発フォーラム—2025 年国際サミット春】

新エネルギーシステムにおける原子力の役割、安全性、持続可能な発展、ならびに技術革新とデジタル変革をテーマに開催された。初日のメインフォーラムに加え、フォーラム 2 日目以降はサブフォーラムが設けられ、国内外の政府関係者、専門家、学術機関、産業界から約 60 名(うち海外から 16 名)が登壇し、政策・制度改革、技術革新、産業チェーンの高度化、国際連携のあり方など、多様な分野での最新の取り組みが共有された。総参加者は約 700 名に上り、34 社約 40 名以上のメディア関係者も取材に訪れた。

オープニングセッションでは、CNEA 理事長であり、中国広核集団 (CGN) 会長でもある楊昌利氏が演説。世界が未曾有の変革期にある中で、原子力分野における国際的な連携がかつてない重要性を持っていることを強調し、中国は「互惠・共栄」に基づくオープンな協力を通じて、原子力安全や持続可能な発展への国際的貢献を一層強めていくと述べた。

メインフォーラムでは増井理事長が登壇し、「日本における原子力発電の現状と展望」と題して、第 7 次エネルギー基本計画が策定され、新規建設に道が開かれたエネルギー政策に触れつつ、日本国内で研究開発が進む次世代炉の進捗状況について講演した。

メインフォーラムの締めくくりでは、CNEA の曹述棟常務副理事長が登壇し、「原子力は持続可能な開発目標 (SDGs) 達成の鍵となるエネルギーであり、安全性・イノベーション・国際協力の 3 要素が未来の原子力発展を導く」と総括した。



フォーラム会場の様子



増井理事長の講演

【第 16 回中国原子力産業国際展示会】

中国原子力開発フォーラムと並行して開催された「第 16 回中国原子力産業国際展示会」は、1995 年に中国国務院が創設して以来 30 周年の節目を迎える、中国の原子力産業界にとって重要なイベントとなった。

この展示会は、中国の原子力産業の発展成果を示し、国内外の原子力関連企業の交流・協力を促進する場であり、また一般市民に原子力を理解してもらうための重要な窓口となっており、今年は中国の原子力産業を代表する企業を筆頭に 59 社(うち 19 社が海外企業・組織)が出展し、初日だけでも来場者数は 1 万人を超える大盛況となった。当協会も会場内にブースを出展し、協会としての取り組みを紹介する資料等の配布を行った。



中国主要企業は巨大なブースを出展



原産協会もブースを出展

【日中意見交換会】

フォーラム 2 日目となる 4 月 28 日(月)には、我々訪問団と、CNEA 曹述棟常務副理事長をはじめとする中国の原子力関係者らとの意見交換会を実施した。

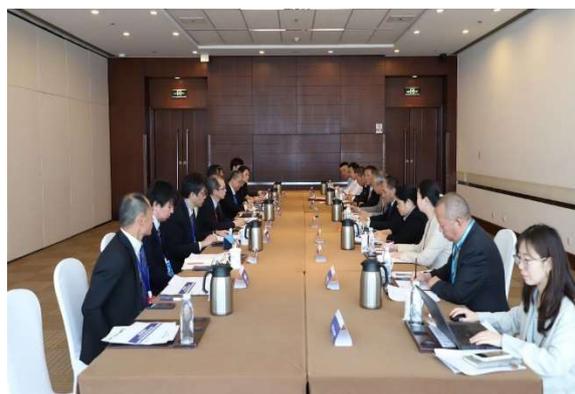
曹副理事長は、「両協会が長年にわたり良好な協力関係を築いてきたことが、両国の原子力の持続可能な発展や東アジアにおける原子力安全の推進に貢献してきた」と述べ、さらに「原子力の安全には国境がなく、今後も安全分野での交流と協力を深め、地域の原子力安全向上に寄与すべきだ」と強調した。

増井理事長は、第 7 次エネルギー基本計画の内容に触れ、2040 年度までに原子力発電の比率を 20%に引き上げ、化石燃料による火力発電の割合を現在の約 70%から 30~40%に引き下げる方針が示されていることから、日中間の原子力分野での協力には大きな可能性がある」と指摘した。

また、中国核能電力股份有限公司(CNNP)も本会合に参加し、SOER (Significant Operating Event Report: 運転経験報告)を通じた原子力発電所の産業安全管理の取組みなどについての日本側との意見交換が行われた。



曹樹棟常務副理事長



意見交換会の様子

【視察概要】

○秦山原子力発電所

浙江省嘉興市海鹽県に位置する秦山原子力発電所は、中国で最初に建設された商業用原子力発電所である。複数のタイプの原子炉を有する大規模な発電所であり、その建設は第一期(秦山1号機、30万kWeのPWRで中国独自の設計が採用)、第二期(秦山2号機群、改良型PWR(CNP-600)で各炉65万kWeの出力)、第三期(秦山3号機群、CANDU炉(PHWR)を採用し、各炉70万kWeの出力)に分かれている。

訪問団一行が訪問した科学技術館では、中国における原子力発電の歴史や今後の展望について、幅広く紹介する展示が行われており、一般の来館者にも分かりやすい内容となっていた。当日は多くの地元の学生たちも訪れており、教育的な場としても大いに活用されている様子がうかがえた。



秦山原子力発電所科学技術館の見学

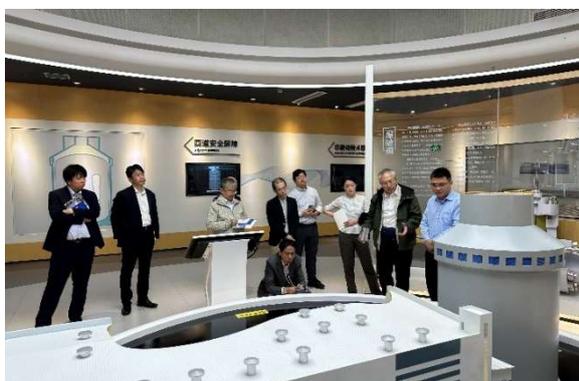


科学技術館内に保存・展示される秦山1号機初期の中央制御室什器

○三門原子力発電所

浙江省台州市三門県に位置し、中国核工業集団(CNNC)が運営する三門原子力発電所は、米国ウェスチングハウスが開発したAP1000型加圧水型炉(PWR)を世界で初めて採用し、1号機が2018年9月、2号機が同年11月に営業運転を開始した。各炉は125万kWeの発電能力を持ち、中国東部の電力供給を安定化させる重要な役割を果たしている。

三門発電所で説明を担当された鄭・原子力安全部部長には、訪問団の参加者からAP1000の設計に関する多くの質問が寄せられ、それら一つひとつに対して丁寧かつ詳細なご説明をいただいた。また稼働中のAP1000の中央制御室に入室し、間近で運転員の方々の業務を視察させてもらえたことは大変貴重な経験だった。



AP1000の設計について説明を受ける訪問団



発電所内での集合写真

以上